

21世紀の生のための

キーワード

——新しい批評のことば——

大貫隆史 河野真太郎
Onuki Takashi Kono Shintaro

信じる

こういう場面を、少しばかり想像してみしてほしい。

あなたは、自宅にほど近い横断歩道を渡ろうとしている。この横断歩道には信号が付いていて、いま青になっている。用心深いあなたは、車がきちんととまっているかどうか、念のため確かめる。あなたの右手には、車が一台停止している。運転している30代半ばに見える男性は、少し疲れているのだろうか、ハンドルにうつろな感じでもたれている。とはいえもちろん、車はしっかりとまっている。あなたは左手に素早く視線を移す。そうだった、ここは一方通行なので、そちらからは車は来ない。ようやくあなたは安心して、横断歩道を渡りはじめる。

「あなた」の行動は、いささか心配性に過ぎるほどに、慎重なものに見える。ここまで用心しておけば、絶対に事故に遭う

ことはないようにも思えるくらいだ。とはいえ、それは本当なのだろうか。こう疑うことはできないか。

もし運転している男性が、アクセルをうっかり踏んでしまったら？ 一方通行を、逆走してくる車が万一いたら？ いやいやそれどころか、信号が万一故障してしまい、運転手が前方をよく確認せず発進してしまったら？ あるいは、「あなた」が突然ころんでしまって、それに運転手が気付かなかつたら？ 運転手は疲労気味だから、そんなことがありえないとは言い切れないかもしれない……。

ここまで疑ってしまうと、「あなた」は、横断歩道を渡れなくなってしまうかもしれない。

ということは、私たちは通常、ここまで疑っていない、ということになるだろうか。運転手は、アクセルをうっかり踏んだりしない。信号もきちんと点検されていて、突然故障などしない。歩行者がころんだら、その人にぶつからないように、運転手はきちんと前方確認をする。このように、なんとなくかもしれないが、私たちは感じている。だから、横断歩道を渡ることができるのである。

さて、ここでちょっと考えてみたいことがある。運転手が事故を起こさないように気を配り、そして、信号が確実に保守点検されている。この二つのことを私たちは、「信じている」のだろうか、それとも、「知っている」のだろうか？

■「信じていること」と「知っていること」

まず、先に述べた二つを、私たちは「信じている」から横断歩道を渡れる、という言い方をしてみよう。信号は故障しないと「信じている」。運転手は歩行者に突っ込まないと「信じている」。

こうした言い方に、なんとも不自然な印象を私たちは受けてしまう。異様な印象すら受けるかもしれない。これはなぜか？

ひとつには、なにか勝手な思い込みがあるように感じるから、ということになるだろう。場合によっては、なにやらゆがんだ信念のようなものがあって、信号の故障や乱暴な運転がない、と思い込んでいるような感じさえする。言い換えると、「信じる」という言い方をするとき、そこには、特段の「根拠」がないような感じがしてしまう。そして、そういう無根拠な言い方に、私たちは不自然な感じを抱くのである。

となると私たちは、「信じている」のではなく「知っている」から横断歩道を渡るのだろうか。歩道の横断が安全だと、私たちは「知っている」。なるほど、この言い方は、「信じている」よりも、自然な感じがするようだ。先ほど見たような、ちょっとあやしげな印象は、ひとまず生じてこない。

こういうことである。信号を渡るといような日常的生活の場面に関する限り、いまの私たちは、「信じている」という言い方よりも、「知っている」という言い方のほうを、より自然に感じてしまう。別な言い方をすると、「信念」よりも「知識」のほうが重視されるような、そんな仕組みのなかに私たちはいる。歩道を渡ることが安全だという「知識」に基づいて私たちは渡っているのであって、そこには「信念」など関係していない、というわけだ。

しかし、それは本当だろうか。信号を渡る私たちは、それが安全だという「知識」だけをたずさえているのか。安全だという「信念」は、そこにまったく存在していないのか。

信号はまずもって故障したままにはならない。運転手もおおかたのところ安全な運転をしている。こういう「知識」を、私

たちは持っているらしい。けれど、もしかしたら危ないかもしれない。何万分の一、何千万分の一の確率で、事故にあってしまうかもしれない。こういう（やや神経症的な）不安を、根拠のはっきりとした「知識」は、取りのぞいてくれるだろうか。いまここで信号を渡る「あなた」が、絶対に事故に遭遇しないと告げてくれるのは、根拠の明確な「知識」なのか。

■「信念」とはなにか？

どうやらそうではないらしい。たとえば、信号は絶対に故障しないと「知っている」であるとか、無茶な運転をする人は絶対にいないと「知っている」という言い方を考えてみるとよい。ここまで断言してしまうと、やはり不自然な感じがする。

歩道の横断が、絶対に安全だと「知っている」わけではない。まあ大丈夫だろうと、なんとはなしにあやふやに感じながら私たちは信号を渡っている、とも言えそうである。これは「知識」とは言いにくい。というよりも、「根拠」のない感覚のようなものだろう。信号や車が突然故障したり、運転手が突如ミスをしたりすることは、まずないだろうという漠とした感覚があって、私たちは歩道を横断しているのである。

この感覚はどういうものなのだろうか。くり返しになるが、これは「知識」とは違うらしい。突飛なことに聞こえてしまうかもしれないが、これは、ある種の「信念」から生じる感覚と言えはしないか。じつのところ私たちは、万が一のことは起きないだろうと「信じて」、歩道を渡っているのである。もしこうした「信念」がまったくないとしたら、私たちは道路を渡れないことだろう。危ないかもしれないとひたすら疑いつづけていたら、いつまでたっても横断できないのである。

ここまでの議論を整理しておこう。ごく日常的な行動を言葉にすると、「信念」よりも「知識」のほうが重視されるような価値の体系のなかに、私たちは生きている。言い方を変えると、そういう価値観が支配的である状況のなかに、私たちはいる。その一方で、こうした支配的な価値観にどっぷりつかっているとわかりにくいのだが、最終的には「信念」を必要とするような経験も、私たちはしている。「信念」は「知識」よりも軽んじられているようなのだが、かといってそれがなくなると、道路の横断にさえ困ってしまうのである。

こうした状況は、どうやって形成されてきたのだろうか？ その系譜を探っていくことにしよう。

■「科学」と「イデオロギー」

ここまで論じた「知識」と「信念」を、すこし違う言葉で言い表してみよう。そうすれば、「知識」は頼りになるが「信念」はあやしいものだ、という私たちの価値観の出所がわかるかもしれない。つまりそれは、「科学」と「イデオロギー」である。

科学というと、現在は、実験や調査で根拠を与えられた知識の体系という意味があるし、「科学的」というときにもほぼ同じである。対する「イデオロギー」はちょっと耳になじみのない言葉かもしれない。おそらく日本語でこの言葉が使われるときには、たとえば共産主義イデオロギーやナショナリズムのイデオロギーといった形で、自分以外のひとびとや国民が抱いている信念の体系という含意がないだろうか。そう、テリー・イーグルトンが『イデオロギーとは何か』でまず指摘しているように、現在の「イデオロギー」の用法には、それは自分以外のだれかの（多くの場合はゆがんだ）信念だというニュアンスが

ある。つまり、科学とイデオロギーは先に述べた知識と信念の対立とほぼ並行関係にあると言えそうだ。

しかし、ずっとそうだったわけではない。

まずは「科学」から見てみよう。科学という言葉は明治時代初期に **science** の翻訳語として日本語に定着した（『哲学・思想翻訳語事典』）。この **science** の語源はラテン語の **scientia** で、このラテン語に「科学」の意味はもちろんない。その意味は、知 (**knowledge**) であった。レイモンド・ウィリアムズ『キーワード辞典』によれば、この **science** という語の内部には、理論的な知と実際の知との区分がしだいに生じ、後者を意味する際には **science** ではなく **art** (技、芸) が用いられることも増えたという。この区分が深まってやがて **science** が自然科学を意味するようになる（したがってそれ以外の知には用いられなくなる）のは 18 世紀後半から 19 世紀前半のことである。「知」一般の意味を持っていた **science** が「科学」となった瞬間に、**art** と呼ばれることもあった実際の知はそこから排除された。具体的には芸術や文学だけではなく、社会や政治、人間の経験にかかわる領域である。

つづいてイデオロギーであるが、これまたもともとは先に確認した意味とは似ても似つかぬ意味を持っていた。ふたたびレイモンド・ウィリアムズによれば、**ideology** が英語に登場したのは 1796 年である。その時の意味を直訳すると「観念学」であった。つまり、**idea** (観念) に関する **-logy** (学) ということだ。おどろくべきことに、イデオロギーとは「知」の一形態だったのである。現代のような意味を最初に広めたのは、フランス革命後の混乱に乗じて軍事独裁政権を樹立したナポレオン・ボナパルトだった。彼は「イデオロギー／イデオログ」を

「空論／空論家」の意味で使い、啓蒙思想とそれに基づいた民主主義の理念の唱道者たちを非難したのである。まさに、「自分以外のひとびとのゆがんだ信念」という意味でのイデオロギーだ。これはまさに、先に述べた「信念」そのものである。そこには、「経験」上のものだろうが「科学的」なものだろうが、根拠はない。ほかの人間が思い込み、行動の動機にしていること、それがイデオロギーであると。

■実験と経験

さて、そのようなわけで科学とイデオロギーは、それぞれの意味の変容の結果、対立する言葉になった。これがどうやら、前半で述べた「知識」と「信念」の対立の系譜の一部になっているようだ。知識とは合理的な根拠のあるもので、信念は根拠のあやしいゆがんだ意識である、という対立だ。そしてそのような分離が起きる前には、**science** も **ideology** も、「信念」との対立において定義されるのではない)「知」のことだったのである。その起源において、「知識」も「信念」も、いずれも「知」の一形態だったわけだ。

その系譜がわかったところで、私たちは **science** や **ideology** が持っていた「もともとの意味」を取り返せばそれでいいのか。単に「すべては知である」とか「すべてはイデオロギーである」と言えばいいのか。それはちょっと難しそうである。なぜ難しいかといえば、前節で述べたような意味の分断と排除は、単に言葉の上での出来事ではなく、私たちの社会全体とその社会の中における私たちの経験の変化とからみあったものだからだ。

そのからみあいを理解するためにふたたびウィリアムズを参照しよう。ここで興味深いのは、**science** の分断に先んじ

て起きたのが、「経験」という言葉の分断だったとウィリアムズが指摘していることである。どういうことか。それを理解するために、少々まわりくどいが『キーワード辞典』の **experience** の項目を開いてみよう。すると冒頭は「**experience** と **experiment** の古い結びつきは、現代の主要な用法では、すっかり廃れてしまった感がある」(121)と書き起こされている。これまたいったいどういうことだろうか。**empirical** (経験的)の項目を見てみると、じつは18世紀以前に **experience** と **experiment** は同じ意味を持っていたというのだ。

よくよく考えてみれば、これは現代の意味からしても理解不可能なことではない。経験 (**experience**) も実験 (**experiment**) も、いずれも「なんらかのデータを集めてそれを知識にしたもの」と部分的には定義できるからだ。経験のある人というのは、多くの「実験」によってさまざまな人生知を手にした人だとは言えまいか。また、「科学的」な実験というのは、さまざまな「経験」から一般的真実を導き出す手続きではないか。つまり、現在では「科学」の根拠となる実験も、「イデオロギー」の原因とされる経験も、同じ意味と用法を持っていたとウィリアムズは述べているのだ。

しかしそれにもかかわらず、それらには別の名前が与えられた。そして **experience** と **experiment** が別のものを指すようになったことは、**science** が「知」一般から「科学」へと限定される際に決定的に重要だった。ここから先は、現代の私たちにもよくわかる話かもしれない。つまり、「経験」といえば人間の主観的な生に関わるものであり、「実験」といえば客観的・合理的なデータの検証であるというとらえ方は、いまでは当たり前になっている。しかし、**science** が **experiment** に基づく

「科学」になるためには、「経験＝実験」を主観的・個人的な「経験」と、客観的な「実験」とに分け、前者は science には関係なく、後者こそ science の領域である、という区分と排除をすることがそもそも必要だったのだ。このような経験の分離は、社会の分離へとつながる。つまり、たとえば専門家とそうではない人間への社会の分離である。そのような分離によって、たとえば科学技術が社会の総体の複雑な交通の中から生み出されるといった考え方は、想像するのが難しくなる。(本連載「持つ」2011年12月号参照。)

■信念と科学の分離

この、「経験」に基づく信念と、「実験」に基づく科学という分離には、どういうメリットがあるのだろうか。この分離に私たちはあまりにも親しみすぎているので、かえって、どういう意味があるのか、どういう利益があるのかわかりにくい。そこで、冒頭の問いに戻ってみることにしたい。

横断歩道を渡ることが安全だ、という科学的知識(実験に依拠した知識)は、最初に見たように、絶対的なものにはならない。前回までは安全だったけれど、今回も100パーセント安全だ、という知識を私たちは持ちえない。

だからこそ、信念が、どうしても必要とされることになる。横断歩道を渡るあなたの右手にいる運転手が、突然アクセルを踏んだりしない、信号が突如故障したり、道路が突然陥没したりしない、という信頼感あるいは信念が、どうしても必要なのである。

つまりこういうことだ。科学的知識は絶対的なものではない。それでも急いで活用したい。それゆえに信念が要請される

のである。100パーセントの安全を求めてしまうと、横断歩道の設置は難しくなる。まずもって安全ということであれば設置できるが、そのためには、信念が必要不可欠なものとなるということだ。

ここで私たちが取りうる選択肢がいくつか存在する。ひとつは、信念をとことん疑い、さらには、そうした信念を必要とする科学的知識も、徹底的に疑ってみる、というものだ。横断歩道の例でいえば、こう疑ってみることになる。横断歩道は安全であるという信念は、たとえば、信号機の製造会社に利益をもたらすものではないかと。さらには、この信念がなければ、横断歩道の設置ができなくなるわけだから、いわゆる「クルマ社会」の維持がおぼつかなくなるだろう。ということは、自動車会社も、この信念の恩恵にこうむっているのではないかと、とことん疑ってみるのである。

この話は、少々突飛に聞こえてしまうかもしれない。しかし、同じ話を、原子力にあてはめてみるとどうなるだろうか。原子力にまつわる科学的知識は、横断歩道の事例と同様、100パーセントの安全を保証しえない。だからこそ、安全だという信念が要請されることになる。¹ この信念も、いわゆる「原子

¹ 高木仁三郎の指摘する「原子力安全文化」は、こうした信念の体系に対する別名である、とも言える。と同時にそれは、同じく高木が示唆するように、たんなるスローガンであることをやめて、なにか有機体的な習慣の体系へと成長する可能性をも持っているのかもしれない。そして、そうした有機体的な体系は、科学を補完する信念の体系というよりも、本論最終節で見ると、科学と信念の分離それ自体を問い直すようなものになりうるのかもしれない。

力産業」に利するものであったのではないかと疑ってみるのである。原子力は安全だという信念によって、原子力にかかわる科学的知識が絶対的なものではないことが隠されてきたのではないかと、可能なかぎり疑ってみるのだ。

こうした作業には、もちろん傾聴すべき点が含まれている。とはいえ、こうやって疑ってばかりいる作業には、じつは難点がある。いかなる科学的知識も、ゆがみをともなった信念の体系を必要とするのだから、それ自体ゆがんでいると言える。ということは、あらゆる科学はイデオロギー的なものであって、これを批判すべきだ、ということになる。²ところが、そうやってしまうと、あくまで原理的にはという話だが、私たちはあらゆる科学的知識を捨て去らねばならなくなる。あるいは、科学的知識を作り出していくことを、断念せねばならなくなる。

しかしそれは難しい。残念なことに私たちは、ゆがみをともなうことを覚悟しつつも、知識を生産し活用することを、やめられないらしい。ではどうすればよいのだろうか。

■信念を「信じる」

そこでもうひとつの選択肢が出てくる。それは、信念を疑うだけではなく、「信じる」というものである。ちょっとわかりにくいので言い換えると、これは、科学と信念の分離に、ひそかに込められたひとびとの願望を探知し、それを「信じる」と

² 科学のイデオロギー性を言う著述は数多いが、まず参照されるべきはトマス・クーンのパラダイム仮説であろう。ある時代の科学の対象、方法、理論的枠組みは科学自体の合理性よりは時代のイデオロギーに左右されるという議論である。

いうことである。

先に見たように、この分離は、絶対的なものたりえない科学的知識を活用するために要請されたのだった。分離がおこなわれるのは、科学的知識によって、何らかのより良いものをもたらすためだ。横断歩道があった方が、原子力発電所があった方が、より幸福な生が実現すると「信じて」、その分離は選択される。たしかにこの、科学と信念の分離はふかい悲劇をもたらすことがある。だからこの分離によって、万一の事故可能性が隠されてしまうのではないかと疑うのはよい。しかし、「より幸福な生」をもたらしたい、という願望までも、疑ってしまつてよいのだろうか。

それ自体は真正な願望なのではないだろうか。とはいえ急いで付け加えると、真正だけれど、ある「限定」や「制約」をこうむっている願望なのではないか。³

そこで願望されているのが、「より幸福な生」であることに疑いはない。けれど、その「より幸福な生」は、限定され制約されたものでもある。例をあげてみよう。自動車がある限りは、おそらく横断歩道は必要なものであり、安全という信念が

³ ここで述べていることは、別の言葉で言えば「イデオロギーとユートピアの表裏一体性」ということである。「イデオロギーとユートピア」という主題については、カール・マンハイムが同名の著書で、支配階級の現状維持に資するものをイデオロギー、被支配階級の現状変革の欲望をユートピアと区別しようとした。それに対し、ユートピア的なテキストが書かれるためにはイデオロギー的願望充足への衝動が必要であることを執拗に論じつづけているのはフレドリック・ジェイムソンである。『政治的無意識』から『未来の考古学』にいたるまで、その点は一貫している。

要請される。しかし、そもそも自動車が存在せず、自動車とは別の交通手段が確保されていたらどうなるだろうか。そう、そうした信念はいらぬのである。ということは、ここで科学と信念をむりやり分離させているのは、自動車を必須のものとする社会である。ここでは、「万が一の事故」という悲劇は排除されない、という限定や制約が付された上で、「より幸福な生」が追求される。

もうひとつ例を出しておく。原子力が必要である限りは、原子力が安全だという信念が必要である。知識の観点からは100パーセント安全とは言えないからこそ、信念として、それは安全だと言わねばならなくなる。原子力の安全性に「見切り」を付けるとは、科学と信念を分離させる、ということなのである。しかし、そもそも原子力が必要とされない社会に私たちが生きていたら、そうした「見切り」すなわち分離は必要ない。ここで、科学と信念を分離させているのは、そう、ほかならぬ私たちが生きている社会なのである。同じくここでは、「万が一の事故」は起こりうるという限定付きで、「より幸福な生」が願望されている。

横断歩道から原子力の事例にいたるまで、私たちのすまう社会が、科学と信念をむりやり分離させている。100パーセント安全ではないものを急ぎ活用せよという社会的圧力のもと、科学と信念は分離を強いられる。それによって、科学的知識をつくりだす私たちの願望は、限定され制約されてしまう。

しかし、こう「信じて」みるとどうなるだろうか。かなうものならば、安全性に「見切り」などだれも付けたくないはずだと。本当はだれも科学と信念を分離させたくないはずだと。なぜなら、分離や「見切り」をおこなうのは、「より幸福な生」

のためなのだから——こういう願望の所在を「信じる」のであれば、この分離に込められた願望とは、なんとも逆説的だが、こうした分離をおこないたくない、というものなのである。

科学と信念が、いまのような形では分離していない社会。ここでは、科学も信念も、別の名前で呼ばれているかもしれない。ここでは「経験」も先に述べたような形の分離をこうむってはいない。なんとも途方もない夢物語に聞こえるかもしれないが、その実現の第一歩は、「疑う」ことではなく「信じる」ことなのである。

〈参考文献〉

- テリー・イーグルトン『イデオロギーとは何か』大橋洋一訳 (平凡社、1999年)
- 石塚正英・柴田隆行監修『哲学・思想翻訳語事典』(論創社、2003年)
- レイモンド・ウィリアムズ『完訳 キーワード辞典』椎名美智ほか訳 (平凡社、2002年)
- 高木仁三郎『原発事故はなぜくりかえすのか』(岩波書店、2000年)
- トマス・クーン『科学革命の構造』中山茂訳 (みすず書房、1971年)
- カール・マンハイム『イデオロギーとユートピア』高橋徹・徳永恂訳 (中央公論新社、2006年)
- フレドリック・ジェイムソン『政治的無意識——社会的象徴行為としての物語』大橋洋一・木村茂雄・太田耕人 (平凡社、2010年)
- 『未来の考古学——ユートピアという名の欲望 I』秦邦生訳 (作品社、2011年)
- (大貫: 関西学院大学准教授/河野: 一橋大学准教授)